



日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第26号 (2019年10月1日) / Núm. 26 (1 de octubre, 2019)

事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1-4F
㈱ガリレオ 学会業務情報化センター

東京オフィス内

Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852

e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp

(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会編集部

〒466-8666 愛知県名古屋市昭和区八事本町
101-2

中京大学国際教養学部

木越 勉宛

Tel: 052-835-7946

e-mail: kigoshi.tsutomu@gmail.com

目次

【巻頭言】

吉田彩子 「私の学会放浪記」 2

【追悼】

野谷文昭 鼓直先生の大いなる遺産 3

【エッセイ】

1. 青砥清一 映画『ローマ』とメキシコ先住民言語 5
2. 塚原信行 準公共財としての研究書 7
3. 小川雅美・柳田玲奈
TADESKAの近況について
～教師たちによる自律的な学習活動のひとつのあり方～ 8

【書評】

1. 木村琢也 寺崎英樹『スペイン語文法シリーズ1 発音・文字』 9
2. 花方寿行 クリスティーナ・ペリ＝ロッシ『狂人の船』(南映子訳) 10
3. 花方寿行 パブロ・ネルーダ『大いなる歌』(松本健二訳) 11

【著書紹介】

本田誠二 『セルバンテスの批評』 13

【新刊案内】(2018年6月～2019年5月) 14

【『HISPÁNICA』編集委員より】 16

【編集後記】 16

【巻頭言】

私の学会放浪記

吉田 彩子

私が日本イスパニヤ学会に入会したのは専任講師になった年だから 1976 年のことだったと思う。出張費で旅行ができるので、若い私は大会に積極的に足を運び、発表を聞いてまわったものである。88 年から 92 年まで庶務委員をつとめた。本学会を日本学会会議の登録団体（現「協力学術研究団体」）に加えてもらうために、長南実理事長に命じられて必要書類を作成し、学会会議の会員候補として東京外国語大学の原誠教授を推薦したのを覚えている。

87 年度後期のサバティカルを機に、グラナダ留学で 69 年から 71 年まで教えを受けたバロック論とゴンゴラ研究の専門家、エミリオ・オロスコ Emilio Orozco 教授のもとで再び学ぶつもりでいたが、直前に訃報が届いた。途方に暮れた私は、トゥルーズ大学のロベル・ジャム Robert Jammes 教授の門をたたくことにした。思想的には隔たりもあるが、ゴンゴラ理解にはオロスコと共通するところがあると思えた。ジャムのすすめで 90 年、国際黄金世紀学会（Asociación Internacional Siglo de Oro=AISO）第 2 回サラマンカ大会に参加し、この学会での継続的な研究発表を考えるようになった。

93 年の第 3 回トゥルーズ大会での発表や、94 年からの 2 度目のサバティカルにおける国立図書館（BNE）での 17 世紀文献の研究、当地でのスペインやフランスの研究者たちとの交遊を通じて次第に研究者としての地歩が固まったように思う。

エアポケットに落ちると飲みかけのコーヒーを頭からかぶってしまう、バラハス発の小型ジェットでピレネーを越え、葡萄園のある屋敷にジャムを訪ねたものだ。孤高の研究者でありながら、来る者は拒まない懐の深さがあった。指導のあとは庭先でシャンパンが冷えていた。季節の野菜やズッキーニのグラタン、近所の農家から届いたフォアグラ、レモンをかけて焼いた地鶏や半身の鮭が並ぶ食卓を囲み、手書きラベルのサンテミリオンを味わうのが楽しみだった。秋には暖炉が燃え、テーブルの脇で黒毛のニューファンドランドが行儀よくデザートチーズを待っている。大きな置き時計が 30 分ごとに時を告げた。庭に 3 万冊の書物を蔵する別棟があったが、ある年、干草の山から火が出て全焼した。それを聞いて見舞いに行くと、ジャムは少しもめげていなかった。

「たくさん保険金がおりましたから、夢だったボデガを建てたよ」と言って樽の試作ワインをふるまってくれた。ジャムの教訓は、いつも生活を楽しむこと、理不尽な運命にくよくよしないこと。それはとても大切なことだ。

AISO には以後 96 年アルカラ・デ・エナーレス、99 年ミュンスター、2002 年ブルゴス、05 年ケンブリッジ、08 年サンティアゴ・デ・コンポステラ、11 年ポアティエ、14 年ヴェネツィアと 9 大会に参加した。アルカラ以降の論文は、カフォスカリ大学出版の *Serenísima palabra* (2017 年) ほか、AISO の actas に掲載されている。

アルカラ大会の遠足は体力勝負だった。早朝に大学をバスで出発し、4 年前にバルカロタの古い民家の壁の中から発見された『ラサリーリョ・デ・トルメス』のメディナ・デル・カンポ版（1554 年刊）等の展示をカセレスまで見に行った。午餐の前にバルセロナからフランシスコ・リコが直行して講演の予定だったが、聴衆が着席してからキャンセルが告げられた。印象的だったのは、誰もが何事もなかったように振る舞ったことだ。ヨット帽にアイビー・ジャケットのマキシム・シュヴァリエ、威厳のある口ひげのハイメ・モル、チンチョンの別

荘を高値で売却したエリアス・リヴァース、若きイグナシオ・アレリャノたちとのバス旅は今では夢のようだ。アルカラに戻ったのは夜 12 時過ぎだった。

ブルゴス大会ではラ・リオハやコバルピアスへの遠足があり、ケンブリッジは各カレッジそのものが史跡だった。ヴェネツィアでは海軍工廠のなかを見学できた。CLO（組織委員会）が趣向をこらした遠足のほかに観劇や音楽会も大会の楽しみである。

アルカラ大会の CLO を率いたマリクル María Cruz García de Enterría を、97 年秋に清泉に招聘した折りに勧誘され、98 年から国際スペイン学会（Asociación Internacional de Hispanistas = AIH）にも参加するようになった。2013 年までの 6 大会で発表した論文も、すべて actas に収録された。

華やかな学会で、今年は 1.50 € の AIH 記念切手まで発売されている。

98 年マドリッド大会ではファン・カルロス国王夫妻主催の歓迎会 vino があり、2001 年ニューヨーク大会の夜会ではソリア公爵夫妻がトゥナを従えて「クラベリートス……」を熱唱し、04 年のモンテレイ大会にはフェリペ皇太子夫妻が臨席された。

07 年パリ大会の開会式では、リシュリユー講堂の壁面に並ぶソルボンやデカルトの座像を眺めながら 68 年 5 月に思いを馳せた。リュクサンブール宮殿の晩餐会にはパスポートの携行が必要だった。

10 年のローマ大会では理事選の候補に推薦され、95 票の得票で 3 位当選したが、12 年春のサン・ミリアンの理事会では運営をめぐる難題に直面する。

13 年のブエノス・アイレス大会で、本部 sede をソリア公爵夫妻文化財団においてスペイン内務省の登録団体となるための規約改定が承認された。

1962 年オクスフォードに集結したメネンデス・ピダル、ダマソ・アロンソらによって設立された AIH が、ピカソの『ゲルニカ』のように民主主義スペインに帰還したとも言えるが、危惧を抱く者も少なくなかった。国際学会の国営化と言う自家撞着をどう解決するかは後世の課題であろう。

かつて AISO が運営の危機に陥った時、スペインの某大学が「うちに本部をおいてくれば面倒をみよう。開催国を替えれば問題ないはずだ」と援助を申し出て総会で議論になったことがある。

CUNY のイサイアス・レルナー Isaias Lerner はこう反論した。

「国際学会の本部は移動しつづけなくてはならない。どこの大学にも、どんな人物にも支配されてはならないからである。いかなる国家、民族、思想、宗教の制約からも自由でなければならない。それでこそ Asociación Internacional なのである。」

（よしだ・さいこ 清泉女子大学名誉教授）

【追 悼】

鼓直先生の大きい遺産

野谷 文昭

2019 年、平成最後の年の 4 月に鼓直氏が亡くなられたことを知った人々は、その事実をにわかには信じられなかっただろう。89 歳だったというのが噂としか思えない生前の氏の颯爽とした活動ぶり、それにこれまで手掛けたガルシア＝マルケスやボルヘスの作品に百歳を優に

超え、なかには不死性を帯びた人物すら登場することからくる思い込みとが相俟って、人が怪しむほど老いとは無縁の印象を与えていたからだ。とりわけ、進行中の仕事にボルヘスについての新書というのがあり、死の直前まで執筆の意欲を示していたというだけに、それが完成に至らなかったことが何とも口惜しい。

鼓氏について語るとき、大きな功績として挙げられるのが、ラテンアメリカ文学の翻訳紹介に努め、日本におけるこの地域の文学の存在感と地位を高めたことだろう。1967年にノーベル文学賞を受賞したアストゥリアスの『緑の法王』の翻訳が最初の本格的仕事になるが、なんといっても1972年に刊行されたガルシア=マルケス『百年の孤独』の邦訳を抜きにしてその業績について語ることはできない。というのも、よく知られているように、日本ではもっぱら「抵抗の文学」「証言の文学」といったルポルタージュ的作品や自然主義的リアリズム作品を生む地域と見なされていたラテンアメリカで、1960年代にそのイメージを打ち破る新しい小説が次々と書かれ、世界的ブームが起きていたことをわれわれに知らせるきっかけとなったのが件の小説だからだ。いささか大げさに言えば、ガルシア=マルケスが1982年にノーベル賞を受賞したときにこの作品の邦訳がなかったなら、1970年代後半から1980年代にかけての日本におけるラテンアメリカ文学のブームとその後の人気の定着という現象は見られなかったかもしれない。1970年代に刊行された国書刊行会の「ラテンアメリカ文学叢書」や現代企画室の「ラテンアメリカ文学選集」、集英社の「ラテンアメリカの文学」といった叢書の企画にも携わり、自ら翻訳も行なうという当時の氏の奮闘ぶりはもはや語り草になっている。そのお蔭で文学が文学として読まれるようになったのである。もっともカンツメの連続のような離れ業は、教員が大学の授業回数に縛られる今日ではもはや不可能なことも確かだ。

一方、特筆したいのが、従来英仏文学者らによる重訳が多かったスペイン語文学の翻訳を、原書から行なうのを定着させたことで、この点でも氏の功績は大きい。典型的なのがボルヘスの作品の場合だろう。もちろん英語版や仏語版が存在し、それをもとに翻訳紹介されてきたこと自体ボルヘスが「世界文学」であることの証ではあるが、やはり重訳に伴う隔靴搔痒感がつきまっていたからだ。さらに氏が英仏独など日本において歴史のある外国文学を専門とする研究者や翻訳者に伍して文芸誌などの座談会に臨む姿はわれわれを勇気づけた。これも後進への大きな遺産と言える。

また、これは筆者の個人的印象になるが、ラテンアメリカの＜新しい小説＞の特徴であるエロスとユーモアを訳文で巧みに表現したことも氏の残した重要な功績だろう。フランコ時代のスペイン文学やラテンアメリカの＜古い小説＞には希薄だったことから、従来この要素に取り組む必要はなかったのだが、＜新しい小説＞はいわばカトリック文化が抑制を強いてきたタブーとしてのエロスとユーモアを解放した。その典型が『百年の孤独』であり、それを見事に表現しえたために、この小説の価値を十全に日本の読者に伝えることになった。

最後に、このユーモアのセンスの持ち主であることが、氏の大きな特質であることを指摘しておきたい。周知のように氏は日常的に冗談を口にしたり、哄笑を招くような話を好んだりする人ではなく、下世話なことはむしろ嫌うタイプだった。だが、文学作品のなかに描かれているそうした要素は文学として好んだ。それは『ドン・キホーテ』の解釈にも窺える。実は筆者が考えたことを氏はとっくに考えていたのだ。それは「憂い顔」または「憂い顔」という訳語への違和感の表明である。ドン・キホーテが激しく殴打され、歯を失い、なんとも情けない表情を浮かべる。それをどう表現するか。単純に言えばロマン主義の悲壮感が「憂い顔」という表現をもたらしたのだが、ナボコフは早々にそれを批判している。鼓氏もある

エッセーで同じことを述べているのだ（「日本経済新聞」2010年10月3日）。近いところでは、荻内勝之氏が「憂い顔」批判を行っている。とはいえ、最近様々な翻訳が出ているものの、いまだにロマン主義的解釈が一般的ではないだろうか。筆者は『ドン・キホーテ』の抄訳を行ったときに、独断で「憂い顔」と「憂い顔」批判を総合する解釈を行ったのだが、前掲の新聞記事を最近見つけ、自分が氏と同様の疑問を抱いていたことをあらためて知った。これは古典の読み直しにつながると言えるのではないだろうか。その点でも鼓氏は常識に囚われず、独自の読み方をする人だった。たとえばタイトルを『孤独の百年』とせず、それが『百年の孤独』という、百年を数詞としての単位ではなく、詩的メタファとして用いたことで、深い意味を孕ませることになった。今や「百年の」という表現をあちこちで見かけるのはそのためだろう。こうした氏の感性は、常識を笑い飛ばす作品の翻訳に役立ったことは言うまでもない。この作品は鼓直という翻訳者を得たことで、その魅力を十分発揮することができたのである。鼓直先生を失ったことは実に残念だが、今はその大いなる遺産に目を向けるべきだろう。

（のや・ふみあき 東京大学名誉教授）

【エッセイ 1】

映画『ローマ』とメキシコ先住民言語

青砥 清一

メキシコ映画『Roma／ローマ』が第75回ベネチア国際映画祭の金獅子賞につづき、今年の第91回アカデミー賞で監督賞など3部門を受賞した。

本作は、1970年代初頭、政治的混乱に揺れるメキシコシティのローマ地区を舞台に、中産階級の家庭で働く家政婦クレオとその一家の日常を描くヒューマンドラマ。それぞれが困難を乗り越えようと模索するなか、若い家政婦と一家の間に育まれていく絆と愛情が、美しいモノクロ映像を通じて映し出されていく。

主人公の家政婦クレオ役を演じた女優、ヤリツァ・アパリシオは、オアハカ出身の先住民系メキシコ人。従来よりメキシコ人女優といえば白人女性が定番であったが、初出演ながら世界の映画ファンを魅了した演技力により、アメリカ先住民女性として初めてアカデミー主演女優賞にノミネートされたことで、貧困や差別に苦しむ先住民の人々に希望と誇りを与えた。

この作品では、普段はスペイン語で話すクレオが同僚の家政婦とミシュテカ語で会話を交わす場面がある。アルフォンソ・キュアロン監督の幼少期の実体験に基づくもので、クレオの先住民としての素性と境遇を意識させられる。だが、主演のヤリツァ自身はミシュテカ語を話せず、共演者から台詞の意味と発音を教わったという。

メキシコでは現在、68語族の先住民言語が話されている。2010年の国勢調査によると、先住民諸語話者は全国で667万人（国民の6.7%）、州別ではオアハカ州が最多の117万人（州民の31%）、これにチアパス州の114万人（同25%）が続く。ミシュテカ諸語は、オアハカ州、プエブラ州およびゲレロ州に分布し、合わせて47万8千人の話者人口をもつ（大分市や倉敷市の人口と同程度）。

メキシコの先住民話者の割合は、減少の一途を辿っている。メキシコ国立統計地理情報院 (INEGI) によると、1930 年は国民の 16.0% を占めていたが、映画の舞台となった 1970 年には 7.8% にまで下がっている。その後も緩やかに下降し続け、2015 年の時点で 6.6%。なかには消滅の危機に瀕している少数先住民言語もあり、減少傾向に歯止めがかからない。

メキシコ憲法は、第 2 条でメキシコが多民族・多文化国家であることを宣言し、先住民言語の保護を定める。かかる憲法の理念が実現するには、社会インフラとして憲法、民法、刑法等、主要法典の先住民語への翻訳が不可欠だ。現在、メキシコ国立先住民言語研究所 (INALI) によりメキシコ憲法の翻訳作業が進められており、これまでナワトル語、マヤ語など 15 言語に全文が翻訳されている。

メキシコのなかでもオアハカ州は、言語法制の最前線に立つ。オアハカ州憲法 (第 1 条、第 16 条) は、同州が多民族、多文化および多言語である旨を定める。2019 年 1 月には、州独自の先住民言語法案が州議会に提出された。

教育面でも、スペイン語と先住民言語によるバイリンガル教育政策が 90 年代から導入されている。オアハカ州の公立小学校では、先住民の衣装、音楽、舞踊、料理などとともに、伝統文化として先住民言語が教育されている。

フォックス政権期の 2003 年に制定された「先住民の言語権に関する一般法」(Ley General de Derechos Lingüísticos de los Pueblos Indígenas) 第 11 条は、スペイン語と先住民言語によるバイリンガル教育を義務教育課程まで保障する。だが、メキシコ国立教育評価研究所 (INEE) が 2018 年に発表したレポートによると、実際にバイリンガル教育を受けている先住民児童はわずか 53% に過ぎない。そのため、先住民言語を第一言語とする多くの児童にとって、中等教育で学習を続けていくことは困難な状況だ。この問題は、メキシコのみならず、スペイン語とグアラニー語によるバイリンガル教育を実施している南米パラグアイでもみられ、児童・生徒の就学率に悪影響を及ぼしている。

このような言語教育の問題とともに、メキシコの先住民系住民の多い地域では、司法通訳と医療通訳の不足も深刻だ。司法通訳の不足は、正当に裁判を受ける権利を先住民から奪うもので、冤罪を生む原因となる。医療通訳の不足は、医師の誤診を生み、また、住民が医療・保健サービスを受ける機会を失うこととなり、まさしく生存権の侵害に相当する。

このような基本的人権としての言語権の侵害が一向に改善されない主な要因の一つは、この問題に対する行政の認識が欠けていることだ。つまり、言語権を扱う教育カリキュラムが不在ないし不十分で、役人自身が言語権に関する教育を十分に受けていないため、事態の深刻さをよく理解していないのだ。いくら法律が整備されたところで実効性を伴わなければ、絵に描いた餅、死文化した “una gran ley” となろう。

今年、国連は「先住民言語の国際年」を記念して、消滅の危機にある世界の先住民言語について意識を高めるためのプロジェクトを展開している。2 月 26 日にはミヘー語学者ヤスナヤ・アギラルがメキシコ連邦議会においてミヘー語で歴史的な演説を行い、メキシコで消されていく先住民言語の保護を訴えた。メキシコ政府は、先住民の人権侵害を解消し、社会的地位を向上させ、そして憲法の保障する民族的多様性の尊重を実現するため、少数先住民言語の保護を強化するとともに、教育、司法および医療分野における言語政策をもっと積極的に促進すべきである。

(あおと・せいいち 神田外語大学准教授)

【エッセイ 2】

準公共財としての研究書

塚原 信行

2018年10月末、スペイン語学・スペイン語教育メーリングリストで、出口厚実先生（大阪外国語大学名誉教授）が蔵書の引き取り手を探しておられることを知った。「スペイン言語学、ロマンス語学、言語学、英語学分野を扱う洋書」およそ1500冊とのことである。ただちに京都大学吉田南総合図書館に一括受入れを打診したところ、「未所蔵のタイトルと冊数を特定し、館長に相談後、運営委員会で審議の上、受入れ可否を決定する」との返事をうけとった。その旨を出口先生に連絡したところ、吉田南総合図書館による引き取りを優先的に考慮していただけることになり、12月12日に無事引き取り作業を完了することができた。最終的には、未所蔵の1380冊をあらたに収蔵することとなった。貴重な蔵書を寄贈していただいただけでなく、引き取り作業完了まで柔軟に対応していただいた出口先生には感謝の申し上げようもない。また、出口先生は蔵書の詳細なリストを準備されていたため、未所蔵タイトルの確認が迅速に進んだことも述べておきたい。

京都大学は3年後には創立125周年を迎えようという総合大学であるが、スペイン語図書の所蔵は少なく、三高時代から教授されているフランス語やドイツ語、1940年に文学部に専修が設置されたイタリア語には比べるべくもない（英語については比べる気すらおこらない）。実際にも「せっかくスペイン語を学んだので原書を読んでみようと思ったが、所蔵がない。なんとかしてほしい」という投書が図書館に届いている。着任以来、教育用スペイン語図書については予算が許す限りで蔵書を増やしてきたが、研究書や一般書までは手が回らないのが実情である。そのために、これまでも上田博人先生（東京大学名誉教授）や福寫教隆先生（神戸市外国語大学名誉教授）が退職される際には蔵書をお譲りいただき、少しずつスペイン語図書や関連日本語図書の所蔵数を増やしてきた。

今回の受入れが京都大学におけるスペイン語図書の充実という意義を持つことは言うまでもない。しかし、さらに重要な点は、これら貴重な研究書が図書館の管理下に置かれたということであろう。個人所蔵の研究書は、いつかは所有者の手を離れる。その際、その価値が生かされる形で別の個人や団体に引き継がればよいが、多くの場合、そうとはならず、BOOKOFFに二束三文で売り払われたり、廃品回収に出されることもあると聞く。しかし、とりわけ人文系の学問にとって、図書とは、それ自体が研究の対象であり、学問の基盤をなす。研究書を含む図書へのアクセスが保障されていなければ、学問の発展は望めない。このような観点からすると、個人所蔵の研究書は、図書館の管理下に置かれることで、準公共財としての性質を獲得するとも言える。京都大学吉田南総合図書館が管理することになった出口先生蔵書が、インターライブラリサービス等を通じて多くの人に利用されることを期待したい。

（つかはら・のぶゆき 京都大学准教授）

【エッセイ 3】

TADESKA の近況について

～教師たちによる自律的な学習活動のひとつのあり方～

小川 雅美・柳田 玲奈

2006年、関西スペイン語教授法ワークショップ（Taller de Didáctica de Español de Kansai, 略称 TADESKA）が小さな産声をあげて、今年で13年目です。専門分野としての「教授法」に限らず、私たちの教師としての仕事の仕方を多角的に話し合うのが TADESKA という場です。スペイン語教師であればどなたでもいつでも参加可能であり、会費は無料です。ご本人の了解のもと例会開催案内などをお送りしている方々を登録メンバーとさせていただいています。登録メンバーは現在100名を少し超えています。例会へは通常10名程度が出席し、特別イベントの際は20～30名参加することもあります。なかなか参加できないメンバーからも折に触れ温かいご支援をいただいています。このように、いろいろな距離感でもって日本人およびネイティブの多くの方々に支えられ、ゆるやかな学習コミュニティとしてこれまで続けることができました。

ここ数年の活動として特筆すべきことは、2015年にグラナダで開催されたスペイン語教育の学会 ASELE（Asociación para la Enseñanza del Español como Lengua Extranjera）でのワークショップ開催、GIDE（スペイン語教育研究会）との合同企画の実施、そして TADESKA のガイドラインの作成でしょう。ASELE では、職場の枠を超えて教師らが自由に意見を述べ合える場を教師自らが作っていくことの意義を参加者のみなさんに体感していただけたようです。一方、同年 GIDE が上梓した『スペイン語学習のめやす』を基に、2016年度、17年度には、現場の条件に応じて使えるような20分程度の授業活動案を作り模擬授業をするワークショップを毎月の例会で実施しました。また、同書のコンセプトおよび具体的な教案の作成等をテーマとして、2015年度から年1回、計3回にわたって開催した GIDE との合同企画では、大変活発な意見交換を行うことができました。話し合いを重ねることによって、学会発表や出版物からだけでは見えにくい教授法研究者や現場教師の真意がより明確になったと言えます。最後に、2019年3月より明文化した TADESKA の活動指針には、TADESKA が特定の教授法を推進するのではなく、メンバーが対等かつ自由に、そして相手の考えを尊重しつつ話し合い共に学ぶ会であることなどを記載しています。

ところで、外国語教育の存在意義が今ほど問われている時代があったのでしょうか？ 自動翻訳や AI がある状況で、なかなか報われる実感を得られない語学学習をなぜ行わないといけないのでしょうか？ そのような根本的な懐疑心に揺さぶられている外国語教育の現状で、スペイン語を学ぶことの価値を次世代、またその次の世代に継承し、若い人たちが学習活動に新たな価値を創造するパワーを芽生えさせ、育てていく貴重な機会は、まさに日常の授業活動とともにあるのではないのでしょうか？ 日常的な授業実践では、学ぶことの価値とは何かを絶えず自らに問うこと、そして自分が信じる価値を他の人々、とりわけ学生たちにどう伝えていくかということが重要になるでしょう。TADESKA では教師としての現場感覚、スペイン語圏の様々な分野についての知識、そしてひとり人間としての感性や社会的良識が、スペイン語そのものや教授法研究についての知識と等しく重要です。様々なバックグラウンドを持ったスペイン語教師の方々に気楽に参加していただけるよう、今後も身の丈にあった、それでいて時代の先を読んだ活動を模索していきたいと考えています。

今年度の主なテーマは「教科書」です。2020年2月実施予定の「関西スペイン語教師の集い」においても教科書をテーマとした話し合いをすべく現在計画中です。実施済の活動の議事録や資料、上述のガイドライン、そして次回の例会もしくは企画の案内は、次のTADESKAホームページに掲載しております。ネット検索の合間に訪れていただければ幸いです。また、TADESKAの活動にご興味ご関心のある方はお気軽にTADESKA世話役(小川雅美・柳田玲奈)までご連絡くださいませ。

TADESKA ホームページ : <http://tadeska.sakura.ne.jp>

TADESKA メールアドレス : tadeska_osaka@yahoo.co.jp

(おがわ・まさみ 京都大学等非常勤講師, やなぎだ・れいな 関西外国語大学講師)

【書評1】

寺崎英樹『スペイン語文法シリーズ1 発音・文字』

(大学書林、2017年)

木村 琢也

本書は、東京外国語大学名誉教授であり日本イスパニヤ学会の元会長でもある寺崎英樹氏の手による『スペイン語文法シリーズ』の第1巻として2017年に出版された著作である。著者によるとこのシリーズは全6巻で完結する予定で、本稿執筆時点で第2巻『語形変化・語形成』(2019年)までが刊行されている。

本書は大きく「Ⅰ. 音韻」と「Ⅱ. 正書法」の2つの部分に分かれ、前者はアカデミアの『新スペイン語文法, 音声学・音韻論編』(2011)に、後者はアカデミアの『スペイン語正書法』(2010)に原則として準拠していることが「まえがき」で述べられている。スペイン語教師兼スペイン語研究者である私たちにとって、個々の具体的項目についてアカデミアがどのような見解を示しているかを知ることは重要であり、そのためにアカデミアの刊行物およびウェブサイト参照することは必須であるが、アカデミアの刊行物は『新スペイン語文法』(全3巻)も『スペイン語正書法』も浩瀚、ウェブサイトの情報量も膨大であり、目指す情報にたどり着くことは時に困難を極める。このように日本語で書かれた信頼できる手引きが刊行されたことは私たちにとってこの上ない朗報であり、これから刊行される4点も含めて、私たち日本人研究者の必携書になることは疑いない。

「Ⅰ. 音韻」は、まず調音音声学の基礎である音声器官と音声表記の説明から始まり、音素の概念を導入した後に、個々の母音・子音の説明が続くという、オーソドックスなスタイルで書かれている。母音・子音の後には音節、アクセント、リズム、音調(イントネーション)が続き、韻律的側面もしっかりカバーされている。日本語母語話者向けの好適なスペイン語音声学入門書が存在しない現状では、本書に適切な教師の指導と音声資料を補うことで、スペイン語音声学の教科書として活用することも十分に可能であると考えられる。

「Ⅱ. 正書法」に関しても、このように日本語でエッセンスをまとめた記述は管見の限り存在していなかった。エッセンスとは言え、ここにはスペイン語正書法の歴史、音素と文字の対応など、学問的水準の堅実な記述を見ることができる。実用的観点からも、大文字・小文字の使い分けや数表現の書き方、さらに2010年正書法によって変わったアクセント記号の使い方など、私たちが戸惑いがちな諸点についてアカデミアの原典に当たらなくても本書を

見て解決することができる点で、きわめて有用である。

細かく見ると問題点もないわけではない。「Ⅰ. 音韻」の中では例えば p.45 から p.48 にかけて /b, d, g/ の非閉鎖音異音を「摩擦音」と呼んでいるが、最近の研究ではアカデミアの『新文法』も含めてこれらは接近音であると見るのが一般的である。また、p.48, 49 および p.59 で、スペイン語の /k, g, n/ などの子音が /i/ に後続されても通常は口蓋化しないと述べられているが、正しいかどうか疑問である。

「Ⅱ. 正書法」は内容の性質上、校正の煩雑さは想像に難くないが、本稿の筆者が発見した誤りと思われる箇所を以下に挙げる: *cuásr* → *cuásar* (p.107), *mnemotécnicico* → *mnemotécnico* (p.113), *psicoanálisis* → *psicoanálisis* (p.113), 関係節 → 関係詞 (p.124, 2行目), 2000年 → 2010年 (p.125), 次よう → 次のよう (p.137, 下から2行目), AND → ADN (p.139), 子音 + s → s + 子音 (p.154)。

このような軽微な問題点があるとは言え、本書は寺崎氏の他の著作と同様、特定の理論に偏らない抑制の効いた記述から成っており、安心して読め、かつ安心して人に勧められる一冊である。概念の定義は明快で、かつ論理が一貫しており、難解な部分も丹念に読めば必ず理解できるような書き方がなされている。寺崎氏には形態論と統語論、それにスペイン語史に関する研究・著作が多いが、実は音声・音韻を含むスペイン語学全体を視野に収めた研究者であることが本書によって改めて明らかになった。今後発行されるであろう同シリーズの続刊にも期待が高まる。

(きむら・たくや 清泉女子大学教授)

【書評2】

クリスティーナ・ペリ＝ロッシ『狂人の船』

(南映子訳、松籟社、2018年)

花方 寿行

ウルグアイ出身で、1970年代初頭軍事政権の弾圧を逃れてスペインに亡命した女性作家ペリ＝ロッシの名は、イスパノアメリカ文学研究者にはなじみ深いものだと思われるが、訳者あとがきによれば意外にも短篇1つを除くと日本語訳は全くされてきていなかったという。イスパノアメリカ現代作家、あるいは女性作家の短篇アンソロジーではお馴染みの作家だけに、本書翻訳出版を機にもっと紹介の気運が高まることを望みたい。

僕自身はペリ＝ロッシについて、日常生活における違和感をニューロティックに掘り下げ幻想的な作品に仕上げる、シルビーナ・オカンボやクラリッセ・リスペクトールに近い作風の短編作家という印象を持っていたのだが、本作は長編小説。といってもがっちりとした筋立てがあるというよりは、幾人かの登場人物を狂言回しとした連作短篇風の緩やかな構造で結ばれた章が連続する。主人公エックス(Equis)はその名の通り、しっかりとアイデンティティを設定された人物というよりは、エピソードごとに微妙に変質しながら物語を結ぶ役割を果たす。亡命者あるいはヨーロッパで暮らすイスパノアメリカ出身者の根無し草感、軍事政権による「失踪者 *desaparecidos*」の問題、中絶や男性による暴力をめぐるフェミニズム的な問題意識などが、エピソードごと(数章に及ぶこともあれば、短い章で終わることもある)に現れては消えてゆく。

そんなともすれば散漫になりそうな展開をまとめあげてゆくのが、伏線の回収や人物相関図といった小説世界の論理的構築ではなく、イメージの重ね合わせであるのが、詩人でもあるペリ＝ロッシらしい。ジローナの「天地創造のタペストリー」の断片化された描写は、最終的に閉ざされ構造化された中世的な世界が失われて生まれた、開かれ断片化した現代社会の鏡として本作を位置づける。後半に登場する少年パーシヴァルは、聖杯探索へと連想をつなげ、作中における様々な人物の彷徨を滅びゆく世界を救済するために聖杯を求める騎士たちのさまよいに重ね合わせる。

AI を用いた自動翻訳プログラムへの昨今の期待には反するが、僕が翻訳の難しさを感じるのは、直接的な指示内容によって訳語を確定できる場合はいいが、オリジナルのある単語が含んでいる様々な含意が、日本語にすると 1 つの言葉では置き換えられないことがしばしばあるためだ。特に本作のように言葉の様々な意味が重ね合わせて用いられている作品の場合難しさは格別だが、そのいい例がタイトルの“La nave de los locos”である。これは中世絵画や文学に現れるモチーフであり、その文脈では「阿呆船」と訳されるべきだとある方が指摘されていたが、これはその通りだ。タペストリーや聖杯伝説への言及からも、著者が中世文化を念頭に置いていたことは明らかである。だが一方で、本書に登場する人物たちは精神的なバランスを欠いていたり、マージナルな存在であったりと、ミシェル・フーコーが「阿呆船」を例に取りながら分析を行った『狂気の歴史』における「狂人」に重なってゆく。このフーコー的なニュアンスは「阿呆船」では表現できないので、訳者による「狂人の船」という翻訳も正しい。かつ冒頭に登場する豪華客船が連想させるキャサリン・アン・ポーターの小説は『愚者の船』、あるいはその映画版(ヴィヴィアン・リーの遺作!)は『愚か者の船』と訳されているのだが、過去や偏見にとらわれず旅を続けるイノセントな存在としてのエックスは、タロットカードにおける「愚者」にも重ね合わせられているのだから、このタイトルを『愚者の船』と訳してもそれも間違いにはならないだろう。だがどれも正しく、間違いではないとしても、どの訳し方をしてもそこからは抜け落ちてしまうニュアンスがある。

そんな難しさのある小説だが、本訳書の訳文は繊細で読みやすい。これはジェンダー・バイアスのかかった取り方かもしれないが、男性登場人物の視点から性的に過激な描写をしていても、どこか冷めた距離を感じさせる本作のタッチがうまく日本語になっているのは、女性による翻訳ならではのようと思われる。是非まずは本書をひもといて、ペリ＝ロッシの世界に親しんでほしい。

(はながた・かずゆき 静岡大学教授)

【書評 3】

パブロ・ネルーダ『大いなる歌』

(松本健二訳、現代企画室、2018年)

花方 寿行

近年の松本氏の訳業には、感嘆する他ない。もちろんスペイン語圏の文学に関して、優れた翻訳書を多数刊行されている方々は他にもいらっしゃるし、長期にわたる活動の中で文学史的に重要な数々の作品を訳してこられた方々、そして専門分野の作品をこつこつと訳し続け貴重な翻訳書群を残されている方々もいる。そうした諸賢の中で松本氏の訳業が注目に

値するのは、その「打率」の高さだ。翻訳者としての氏はそれほど多くの翻訳書を出しているわけではないが、注目を集めるきっかけになったのは今やスペイン語圏に関心のある読者だけでなく一般的な文学好きにも人気の作家ロベルト・ボラーニョの紹介者としてであり、引き続き彼の小説作品を幾つか翻訳している。小説家としては比較的マイナー、というかこれからの活躍が期待される中堅のエドゥアルド・ハルフォン作品『ポーランドのボクサー』の翻訳では、2017年第3回日本翻訳大賞を受賞した。こうした日本ではあまり馴染みがなかった小説の翻訳紹介によって評価を受ける一方で、2016年には『セサル・バジェホ全詩集』を刊行。文学畑だけでなくインディヘニスモやスペイン内戦に関心のある読者にも名のみ高かったが、難解さ故に翻訳紹介が進んでいなかったバジェホの全容を日本語で把握できるようにした。

そして2018年には、この『大いなる歌』完訳である。19世紀初頭、独立間もないイスマノアメリカの歴史と風土を総合的に謳いあげようとしたアンドレス・ベリョの未完のプロジェクト（とはいえ残された「詩神への誘い」と「熱帯地方の農業に捧ぐ」はイスマノアメリカ文学史の巻頭を飾り続ける重要な作品だ）を、アメリカ合衆国の民衆と風土を前衛的に詠うウォルト・ホイットマンの『草の葉』の手法を取り入れることによって、約13年の歳月をかけて完成させたネルーダの代表詩集の1つであり、チェ・ゲバラの愛読書として有名な書籍である。このような情報は文学あるいは政治・現代史、キューバやチリに関心のある者には早くから知られていたが、翻訳紹介となると有名な第2章「マチュピチュの高み」のみ切り出した形での翻訳は複数あるが、後はアンソロジーでの断片的な紹介にとどまっていた。それが今回、その全貌が日本語で読めるようになったのである。

『大いなる歌』の完訳が遅れた理由は、その長さや質のばらつき、そして特に詩として優れた部分の難しさにあるだろう。何よりも松本氏の訳業で高く評価できるのは、訳文の読みやすさと日本語詩としての力強さである。本書にはメッセージ性が強くある意味日本語に置き換えやすい詩も多く収められているのだが、「マチュピチュの高み」や「チリの大いなる歌」などイメージ喚起力の強い作品も見事に訳されている。松本氏の前衛詩翻訳としては既に『バジェホ詩集』、特にそこに収められた「トリルセ」翻訳があるが、バジェホよりネルーダの方が松本氏の文体に合っているのだろうか。これ以上は難しいとはいえどうしても読みにくさが残らずにはいられなかった「トリルセ」の詩篇などに比べて、ネルーダ的なイメージの飛躍があるところでも、本書の訳文は決して読みにくくはならない。「マチュピチュの高み」については先人たちの訳業を参考にすることができたのは強みだっただろうが、「アメリカ大陸よ その名を無駄に呼び出しはしない」や「チリの大いなる歌」の場合はそうは言えない。原書の中でも、あるいはネルーダの全詩業においても優れたものであるこの3章の詩を見事に訳しただけでも、高く評価されるべきだろう。松本氏にはできれば、続いては同じチリのニカノール・パラの翻訳にも取り組んでほしい。

さてもう1つ評価すべきなのは、皮肉に響くかもしれないが、松本氏が2段組475ページの詩集本体を訳しきった努力である。松本氏自身もあとがきで指摘しているように、『大いなる歌』は当初よりそこに収められた作品の質のばらつきが問題とされてきた。親共産主義、反アメリカ帝国主義のイデオロギーが前面に出すぎて、詩として「読みやすく」はあっても単調でメッセージ先行の作品が非常に多い。それがおそらく従来、文学的完成度の高い「マチュピチュの高み」のみ切り出して幾人もの優れた翻訳者が取り組んできた一方、完訳に取

り組む者が少なかった理由であろう。だが『大いなる歌』がなぜ1950-70年代の、文学関係者以外の左派運動家や革命家（そして彼らに憧れる学生たち）のバイブルとなり、現在に至るまで数々のアーティストが収められた詩（必ずしも先に挙げた3章に収められた「文学的名作」ではない）にメロディを付けて発表し続けているのかを理解するためには、その全貌を知らなければならない。本書を読むことで明らかになるのは、20世紀のスペイン語前衛詩人として文学史上高く評価されるネルーダの側面だけでなく、サルバドール・アジェンデ政権の成立に貢献し、ピノチェトによるクーデター後には軟禁され死に追いやられることになる、政治的アジテーターとしての側面でもある。比較的単純なイデオロギーに基づくわかりやすい善悪二元論的な展開、そしてイメージの適度な飛躍と反復という文学的な「欠点」は、ネルーダをバジェホよりもフィデル・カストロに近づける。そこにこそ『大いなる歌』とゲバラの親和性の理由が見出されるのだ。本書完訳の恩恵を最も被るのは、もしかしたら文学好きではなく、チリ・キューバを含むイスマノアメリカ現代史に関心の高い読者かもしれない。

（はながた・かずゆき 静岡大学教授）

【著書紹介】

『セルバンテスの批評』（水声社、2019年）

本田 誠二

本書は筆者にとって『セルバンテスの芸術』（水声社、2005年）に続く姉妹編である。前書がセルバンテス芸術の秘密を明らかにすべく、個々の作品に即して論述したものであるのに対し、今回の著書（世界的なセルバンテス学者の代表的論文五点の翻訳および筆者自身の論文九点からなる）によって提示しようと思っているのは、2005年以降、今日まで筆者が関わってきたセルバンテス研究の別の側面、つまりスペイン人の本質との関わりでセルバンテスを捉えようという視点であった。言うなれば前者が作品論であったのに対し、今回は人物論と言ってもよい。

アメリコ・カストロの晩年の論文「いま『ドン・キホーテ』をどう見るか」を日本で紹介することも大きな目的のひとつである。何となればこれは長年のカストロのセルバンテス研究の集大成ともいえるべき論文だからである。またカストロのもうひとつの論文『『ドン・キホーテ』のスペイン性とヨーロッパ化』では、『ドン・キホーテ』のヨーロッパ文学に対する影響をとおして、世界文学のなかの意味づけがなされている。

ヨーロッパ人から見たセルバンテス論を概観するためには、アンソニー・クロースの「一九二五年から今日までの『ドン・キホーテ』批評」も欠かせない。いかに世界のセルバンテス研究がいかにカストロの『セルバンテスの思想』に多くを負っているかを、今一度確認する必要があるからである。ウォードロップの論文『『ドン・キホーテ』はフィクションか歴史か』は、この不朽の作品の根本的性格を論じたものである。またフランシスコ・マルケス・ビリャヌエバの「セルバンテスの《ユダヤ性》に関する問題」もまた、セルバンテスの実像を知り、さらにその作品の特質を知る上では必須の論考である。管見によれば、こうした世界レベルのセルバンテス学者の論点を押えることで、初めてセルバンテス論の基本的問題が把握され、わが国のセルバンテス学の向上が期待できると同時に、世界レベルの研究にキャッチアップすることができるのではないかと考えている。

今回、書名を「セルバンテス批評」とせずあえて「セルバンテスの批評」としたわけは、

セルバンテス自身が当代随一の文芸批評家であり、他の作家・詩人たちを批評・批判することから、自らの文学を構築していった事実をつよく意識しているからである。言うまでもなくセルバンテスに対する批評・論評については汗牛充棟の研究書がある。従って今回は批評家セルバンテスとしての側面をつよく打ち出すことを射程に入れている。「自らが自らを文学的に批評する」というセルバンテス流のやり方は、すでに処女作『ガラテア』において萌芽があり、『ドン・キホーテ』において開花し、『パルナソ山への旅』において完結した。こうした《自己洞察の天才》としてのセルバンテスもまた彼の魅力ある側面である。

モーロ人をテーマとしたいくつかの作品には、イスラム教徒を前にしたときのキリスト教徒としてのスペイン人の在り方を根本から問い直そうという姿勢が窺える。そうした視点から異教徒的なセルバンテスを描き出そうというのが、「《背教者》セルバンテス」という、ややもすれば物議をかもしもすかもしれぬ拙論である。一方で、本書ではそうした異端的な姿勢が、今日のラテンアメリカ文学隆盛の一翼を担ったメキシコの作家カルロス・フエンテスのなかに共感を生み、『ドン・キホーテ』的小説ともいえるべき『テラ・ノストラ』（1975年、拙訳、水声社、2016年）を生み出すきっかけとなったことについても論じている。

今般、水声社刊になる『セルバンテス全集』（2018年）が完結したことに鑑み、新たなかたちのセルバンテス作品の全体像が明らかになることが期待されている。筆者はそれをより明確に打ち出すためにも、批評という視点がどうしても不可欠であり、その肝心のポイントを多角的に提示する必要があると判断した。本書がきっかけとなって、セルバンテスの人間性に対する新たな知見と、より広く深いセルバンテス学へのさらなる一歩となることを期待したい。

(ほんだ・せいじ 神田外語大学教授)

【新刊案内】

2018年6月から2019年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『スペイン内戦（一九三六～三九）と現在』、川成洋、渡辺雅哉、久保隆（編）、ぱる出版、2018年6月
- 『島の「重さ」をめぐって—キューバの文学を読む』、久野量一（著）、松籟社、2018年6月
- 『フェデリコ・ガルシア・ロルカ 子どもの心をもった詩人』、イアン・ギブソン（著）、ハビエル・サバラ（イラスト）、平井うらら（訳）、影書房、2018年6月
- 『奪われた家/天国の扉』（光文社古典新訳文庫）、フリオ・コルタサル（著）、寺尾隆吉（訳）、光文社、2018年6月
- 『歴史人名学序説—中世から現在までのイベリア半島を中心に—』、芝紘子（著）、名古屋大学出版会、2018年7月
- 『極める! スペイン語の基本文法ドリル』、菅原昭江（著）、白水社、2018年7月
- 『チェ・ゲバラの影の下で』（インディアス群書）、カネック・サンチェス・ゲバラ（著）、棚橋加奈江（訳）、現代企画室、2018年7月
- 『ラテンアメリカ所得格差論—歴史的起源・グローバル化・社会政策』（アジア環太平洋研究叢書）、浜口伸明（著）、国際書院、2018年7月

- 『共謀綺談』(創造するラテンアメリカ)、フアン・ホセ・アレオラ(著)、安藤哲行(訳)、松籟社、2018年7月
- 『狂人の船』(創造するラテンアメリカ)、クリスティーナ・ペリ＝ロッシ(著)、南映子(訳)、松籟社、2018年7月
- 『スペイン美術史入門―積層する美と歴史の物語』(NHK ブックス)、大高保二郎、久米順子、松原典子、豊田唯、松田健児(著)、NHK 出版、2018年8月
- 『キクタンスペイン語【初中級編】』、吉田理加(著)、アルク、2018年8月
- 『穢れなき太陽』、ソル・ケー・モオ(著)、吉田栄人(訳)、水声社、2018年8月
- 『わたしたちが火の中で失くしたものの』、マリアーナ・エンリケス(著)、安藤哲行(訳)、河出書房新社、2018年8月
- 『大いなる歌』(ロス・クラシコス)、パブロ・ネルーダ(著)、松本健二(訳)、現代企画室、2018年9月
- 『いっしょにかえろう』、ハイロ・ブイトラゴ(著)、ラファエル・ジョクテング(イラスト)、宇野和美(訳)、岩崎書店、2018年9月
- 『テルエルの恋人たち』(ロス・クラシコス)、フアン＝エウヘニオ・ハルツェンブッシュ(著)、稲本健二(訳)、現代企画室、2018年9月
- 『スペイン語接続法 超入門』(音声 DL BOOK)、高垣敏博(著)、NHK 出版、2018年9月
- 『キューバと日本；知られざる日系人の足跡』、ロランド・アルバレス、マルタ・グスマン(著)、西崎素子(訳)、彩流社、2018年9月
- 『ガルシア＝マルケス「東欧」に行く』、ガブリエル・ガルシア＝マルケス(著)、木村栄一(訳)、新潮社、2018年10月
- 『スペイン・カタルーニャのむかしばなし まめつぶこぞうパトゥフェ』(世界のむかしばなし)、宇野和美(文)、ささめや ゆき(イラスト)、ビーエル出版、2018年10月
- 『ライオンを殺せ』、ホルヘ・イバルグエンゴイティア(著)、寺尾隆吉(訳)、水声社、2018年10月
- 『ラサリーリョ・デ・トルメスの人生』、岡村一(訳)、水声社、2018年12月
- 『なにもない』、カルメン・ラフォレット(著)、木村裕美(訳)、河出書房新社、2018年12月
- 『メキシコ・ルネサンス省察―壁画運動と野外美術学校』田中敬一(著)、あるむ、2018年12月
- 『情熱でたどるスペイン史』(岩波ジュニア新書)、池上俊一(著)、岩波書店、2019年1月
- 『スペイン中世烈女物語；歴史を動かす“華麗”な結婚模様』、西川和子(著)、彩流社、2019年1月
- 『メキシコにおける聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝の変遷史―神の沈黙をこえて』、川田玲子(著)、明石書店、2019年2月
- 『チェ・ゲバラとキューバ革命』、内藤陽介(著)、えにし書房、2019年2月
- 『ハバナ零年』、カルラ・スアレス(著)、久野量一(訳)、共和国、2019年2月
- 『おにいちゃんとぼく』、ローレンス・シメル(著)、フアン・カミーロ・マヨルガ(イラスト)、宇野和美(訳)、光村教育図書、2019年2月
- 『大学のスペイン語 I 基礎力養成テキスト』、高垣敏博、落合佐枝、菊田和佳子、アルトゥーロ・バルオン(著)、東京外国語大学出版会、2019年3月

- 『大学のスペイン語Ⅱ 実力が身につくワークブック』、高垣敏博、落合佐枝、菊田和佳子、アルトゥーロ・バロン（著）、東京外国語大学出版会、2019年3月
- 『カモメに飛ぶことを教えた猫（改版）』（白水Uブックス）、ルイス・セプルベダ（著）、河野万里子（訳）、白水社、2019年3月
- 『20世紀ラテンアメリカ短篇選』（岩波文庫）、野谷文昭（編訳）、岩波書店、2019年3月
- 『チカーノとは何か：境界線の詩学』、井村俊義（著）、水声社、2019年3月
- 『スペイン巡礼 緑の大地を歩く』、渡辺孝（著）、皓星社、2019年4月
- 『テーバスランド』、セルヒオ・ブランコ（著）、仮屋浩子（訳）、北隆館、2019年4月
- 『犬を愛した男』、レオナルド・パドゥーラ（著）、寺尾隆吉（訳）、水声社、2019年4月
- 『コスタリカ選詩集—緑の祈り』（関西大学東西学術研究所訳注シリーズ）、カルロス・フランシスコ・モンヘ（著）、鼓宗（訳）、関西大学出版部、2019年4月
- 『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』（国立民族学博物館論集）、吉江貴文（著）、悠書館、2019年4月
- 『交差する眼差し—ラテンアメリカの多様な世界と日本』（南山大学ラテンアメリカ研究センター研究シリーズ 6）、浅香幸枝（著）、行路社、2019年5月
- 『外交と移民—冷戦下の米・キューバ関係—』、上英明（著）、名古屋大学出版会、2019年5月
- 『七つのからっぽな家』、サマンタ・シュウェブリン（著）、見田悠子（訳）、河出書房新社、2019年5月

【『HISPÁNICA』編集委員より】

『HISPÁNICA』第64号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に
 従い、2020年3月1日から31日（31日消印有効）の期間内にご投稿ください。

（送付先）日本イスマニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨 1丁目 24-1-4F

（株）ガリレオ 学会業務情報化センター 東京オフィス内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

みなさまのご協力をおもちまして、今年度会報を無事に発行できる運びとなりました。

すでに学会ウェブサイト及び会員メーリングリストでご案内しましたように、今年度から会報の原稿は、Word file形式で1行全角40字前後の設定で30～60行程度というガイドラインを定めました。原稿は随時募集しておりますので、国内外の学会の案内と報告、国内の学術講演会および行事の案内と報告、スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介、エッセイ、その他、奮ってご投稿いただければ幸いです。

（広報委員 木越 勉）